博多老舗ものがたり

第67回

「株式会社中村タイル商会」篇（前編）　◎お聞きした方：代表取締役　中村正昭さん

創業明治四十五年。中村タイル商会は、「タイルの販売と施工」という非常に専門的な分野に特化した、一〇〇年を超える老舗企業だ。一般の読者の皆さまにはなじみのない業界かもしれないが、実際には駅や百貨店、マンション等のさまざまな身近な場所で、同社の仕事を見ることができる。企業寿命三十年説などと言われる世の中で、一〇〇年続くのは至難の業。現・四代目社長である中村正昭さんに、創業から今日までを聞いた。

創業したのは明治の最後の年。つまり大正元年とも言われる一九一二年です。当然当時のことを覚えている人はもう誰もいないのですが、幸い創業者である中村正次郎は筆まめな人だったので、日記などをたくさん残していました。それを一〇〇周年の記念誌を作ったときに改めて読み解き、創業時の話をまとめてみたんです。

左官業の家に生まれた正次郎は次男であったことから、いずれ分家独立しなくてはいけない運命を感じていました。そこで職人であった父や兄とは違い、タイルを販売する「商人」となる道を選びます。商売というものに非常に興味を持っていたようですね。まずは起業資金を得るために、軍役に就きます。若い自分が、まとまったお金を手にするには何年か従軍して退役慰労金を得るしかないと考えていたのでしょう。そうして二五〇円という軍資金を手に退役し、一念発起して左官材料製造販売及びタイル販売業を上辻の堂町（現・祇園町）で始めました。文明開化が進み、大正ロマンが広がりつつあった時代、タイルというのは目新しい商材だったのでしょう。創業当時の本社建物は二階建ての洋風建築、タイルをふんだんに使っていたハイカラなデザインであったと言います。写真が残っていないのがとても残念ですね。

正次郎の商売を支えたのは周りの人たちです。彼はとても厳しくもあり、また、人から愛される人間でもありました。起業から三年後には現役兵として召集を受け、出征しているのですが、大正八年の退役まで家族や従業員、周りの人たちが留守を守ってくれています。信用される人柄だったようで、多くの支援者が彼の不在時に家業を継続させてくれました。正次郎は復員後、本格的に事業に取り組むのですが、こういった地元の人々の支援に少しでも応えたいという想いから、「建築用タイル事業」「衛生陶器事業」「水道事業」の三本柱に加えて、「人材育成部門」を作りました。これは当時、まだ貧しい日本では口減らしのために長男以外を丁稚奉公に出す家が多くありました。そういった子どもたちを弟子として抱え込み、時には住み込みで働かせたのです。中村家は黒田藩の御用商人時代から人助けに率先して取り組んでいたと言いますから、その血が正次郎にも流れていたのでしょう。もちろん人助けの意味だけではなく、将来的には彼らが育って大きな戦力になったことも間違いありません。

町の人からの人望も厚く、商売もうまくいっていた正次郎でしたが、一つだけ大きな悩みがありました。

（続く）

■株式会社 中村タイル商会
住 早良区有田7・24・6
☎ 092・852・7328